翻　訳

「ルオドリエプ」(断篇VII—XVIII)

丑　田　弘　忍訳

断　篇　VII

〔赤毛の男は牧人の話を聞いて喜び，若い若い妻のいる老人の許で宿をとることを決める，一方ルオドリエプは牧人の助言に従って，老いた妻のいる若者の許へ赴く。若者は村の貧しい人たちに夕食の食物を分け与える。〕(1) 若者はパンを切り，(2) 彼らに分ち与えた。肉が彼らのために六つの卓(3) に割りあてられた。彼らが満足し，喜んで家路に着いた時，主人（若者）は（ルオドリエプ）にこう言った，「キリストが私に客を遣わしてくださる時は，(4) 私と家族にとって復活祭なのです。あなたが客となって私たちに喜びをもたらす今晩のように。あなたより出ずる物は神が私に与えて下さる物のように思われます。」それから若者はルオドリエプに肉の肩の部分と脚の部分を与えた。ルオドリエプはこれを細かく切り，すべての召使いたちに秘蹟として分ち与えた。その後で，十二分に煮られ，十二分に焼かれた料理が主人の前に置かれた。さらに良質の木目のくるみの木の杯に入れられた上等のぶどう酒とはちみつ酒が。この杯には四本の黄金の川がきざまれていた。底には神の右手が描かれていた。この杯は，ある貴族がこの家で一夜を過した際に，置いていったものであった。それにもかかわらず，この杯でもてなされた客が勧めない限り，主人は決してこの杯で飲まなかった。この杯はこの目的のためにのみとっておかれた。食事が終り，水(5) が運ばれて来たあとで，主人のもとにぶどう酒が運ばれた。(6) 彼はそれを飲むと，客ルオドリエプに渡した。彼はまず女主人に渡し，それから自分で飲んだ。ルオドリエプは卓から離れ，しばらくの間，

横になって休んだ。こうして横になりながら，主人にいかにして礼をすべきかを考えていた。結局彼は女主人にさっそくマントを贈った。彼女が着飾って聖なる教会を訪れることが出来るようにと。(25)

この間赤毛の男が何をしていたかを，ないがしろにしないでおこう。ルオドリエプがこれほど多くの良いことに出会った家へ入った時，赤毛の男は，なぜ老いた雌猿のいる家へ入るのかと，尋ねた。ルオドリエプはこう言った，「お前がわしについてくるならば，ひょっとしてあとからいいことがあるかもしれないぞ。わしは欲したものを見つけた，がお前は探しているものを持つであろう。」多くの人々は(7)赤毛の男に，連れから離れてほかのところへ留まらないようにと勧めた。しかし赤毛の男は無愛想に急いでルオドリエプから離れ，姪のところへ急いだ。これは彼に死以外の何物をももたらさないことになる。彼は柵によって閉ざされた老人の家の門を見つけた。老人は庭に立っていて，彼の二人の息子が彼の前にいた。そこで赤毛の男は門をたたき，また激しくゆすぶって言った。「早くここを開いて，わしを中へ入れてくれ。」老人が「誰が来たのか，柵の間から見なさい」と言うと，息子が駆け出して，「男が門をゆすぶり，たたきこわしている。」と言った，「開けろ，おれを知らないとは何事だ。」それで息子たちは怒って，たいそう腹をたてた。老人は悪漢の暴力を恐れて，彼に門を開けてやるように命じた。赤毛の男はたいそうずうずうしく，高慢な態度で庭の中へ押し入った。彼は兜を脱がず，馬から下りたち，手綱を抗に投げ，狂ったように剣を抜き，彼らの前に無頼漢のように立った。だが結局笑いながら老人に向かってこう言った，「お前さんたちがわしを知っていて，黙っているのはおかしい。」「お前さんが誰だかわしは知らない」と老人は言った，「お前さんはたいそう愚かなふるまいをした。お前さんが何者であるか，わしらに何の用があるか，わしは知らない。」「お前さんのおかみさんはわしのたいそう近い身内さ。おかみさんとだけに話をさせてくれまいか。」老人は「そうするがよかろう」と言って，妻に来るように命じた。彼女はやって来た。赤毛の男が彼女を見た時，彼は心から欲情を駆りたてた。彼は彼女に喜んで笑いかけた。彼女の方も彼に喜んで笑い

かけて，言った，「あなたのお父さんとお母さんがあなたによろしくとのことですわ。あとであなたと二人で，あなたの好きな場所で別の話をせねばなりませんわ。」それから二人は門に立って，柵にもたれた。赤毛の男はこう言った，「まず，わしの言うことをよく聞いておくれ。わしらの話が長くなってはいけない。あの古犬がわしらのたくらみを悟らないように，泣かず，笑わず，抑えていておくれ。わしの言うことに納得したら，お前はあれからすぐにおさらばさ。なぜなら，この地に低くも高くもない中背の立派な若者が来ているからだ。彼は身は小麦粉のように白く，頬は赤く，世の中に彼ほど美男な男はいるまい。お前がいかに美しいか，お前がなんと日々の苦しみを耐え忍んでいるかを，彼が知った時，彼は心から懊悩して，溜息をつきわしにこう言いよった，『おぬしがわしに誠実であれば，親愛なる友よ，行って，あの苦しみを負っている女に言ってくれ，わしが彼女を救い，牢獄から解放することを彼女が望めば，明日彼女が低いホルンの音を聞いた時，彼女がどんなに信頼している女にも告げずに，庭から，こっそりと道に出てほしい。するとわしが多くの人々とかけより，彼女を連れ去ろう。そのあとで，彼女は女主人となり，自分に気に入ったことをするがよかろう。』さあ，愛らしい姪よ，彼にお前の望みを打ち明けるがよい。」彼女がこのすべてを聞いた時，自らを制して，心の中では喜んだが，悲しんでいるかのように彼に言った，「喜んでおっしゃる通りにいたしますわ，信じて下さい。約束しますわ。」赤毛の男は彼女の手を取って，それ以上疑わずに，言った，「報いとして三回わしの言うことを聞いてくれる約束をしてほしい。」「あなたが出来れば十回でも，あるいはあなたが望む度ごとにそうして下さい。」と彼女が答えた。「わしはここから立ち去るふりをするが，お前はそれを止めてくれ。」と言って，老人の方に向かって，「これで暇する」(8) と言った。もし老人がこの女に何らかの力を加えることが出来たならば，喜んでそうしたであろう。彼女は，赤毛の男が立ち去るのを認めないように，老人に再三せがんだ。老人はこう言った。「あの者がここにいたければ，いるがよい。わしらのものはあの者のものだ。」妻は赤毛の男の馬を急いで厩へ引っ張っていった。彼女も赤毛の男

も馬のことはそれ以上考えなかった。もし馬が厩で草でも見つければ，それを食わせておけばよいと。赤毛の男が館の中に入ると，彼女は彼を愛想よく迎え入れた。二人は共に腰を下ろし，語らい，おおいに楽しんだ。指をからみ合わせ，口付けをし合った。老人は中へ入って行った。彼ほど険わしい顔つきはありえなかった。ほんとうは彼の顔がどんなであるか，わからないほど彼の顔には髭が生えていた。ただ曲がって血管の浮き出た鼻を除いて，毛むくじゃらの顔であった。両眼はえぐり取られたかのように暗かった。それをぼさぼさの髪の森がおおっていた。口にあたる穴がどこにあるか，誰も見ることが出来ないほど，長くて濃い髭がおおっていた。彼は食事をたくさん用意するように召使いたちに命じた。彼の妻と赤毛の男のたわむれが彼にとってたいそう不愉快だったので，彼らの間に割り込み，尻で彼らを離した。少しの間彼らは黙っていて，割り込まれたことに腹を立てた。彼らは老人の前にかがんで，さらにたわむれてしゃべりつづけた。これで老人はかっとなって，食卓を調える(9)よう命じ，自分の妻に向かって言った，「いいかげんにしろ。もう恥しらずな事はやめろ。妻がこんなに厚かましいとはとんでもない。夫もそうであってはならぬが。夫のいる前で男とたわむれるなど，もってのほかだ。」こう言って，便所へ行こうとするかのように立ち上がった。そして壁穴から彼らをうかがった。赤毛の男は不運なことに，老人の椅子に跳び移り，一方の手で彼女の胸を，もう一方の手で彼女の脚を撫でた。彼女は毛皮のマントをその上に拡げてこれを隠した。老人は盗人のようにじっとこれらすべてをうかがっていた。老人が彼らのところへ戻って行った時，赤毛の男は彼に席をあけてやらなかった。なぜなら彼女が認めなかったから。それから老人は大いに憤激して端の席に腰を下ろし，夕食を運ばせるよう妻を再三うながした。彼女は彼をばかにして夕食を遅らせ，冗談を言っていた。老人は，「夕食の用意は出来ているのか」と召使いたちに尋ねた。「お好きな時にお召し上がれになります」と彼らは答えた。彼は言った，「さあ，妻よ，夕食にして，それから床に就こう。お前たちの愛する友が休まねばならぬ時だ。お前たちはその者をたいそう疲れさせた。さあ休ませなさい。」(129)

断　篇　Ⅷ

〔夜のうちに，赤毛の男と老人の妻はたいそう親密となった。老人はこの現場をおさえ，赤毛の男と老人は格闘となり，老人は重傷を負う。死に瀕している老人のもとに，終油の秘跡のために司祭が呼ばれる。〕[10] 司祭が来て，老人に信経を唱えさせるよう，手本を示そう[11]とした。——老人は喘ぎ喘ぎ“クレードー（我信ず）”と唱えるのがやっとであった。犯した罪を懺悔するように司祭はうながした。うなづきと，つぶやきで，懺悔を行なったことを示した。老人は主の御体を通してあらゆる罪から浄められた。息を引き取りながら，魂を主に委ねて，言った，「慈悲深きキリストよ，罪深き私を憐れみ給え。私の生命を奪った者たちを許し給え。私の息子たちも彼らを許さんことを息子たちに諭し給んことを祈り上げます。」彼はこう言ってから，口を閉ざし，ただちに生命を終えた。(10)

夜がしらんでくるや，人々が方々から集まって来た。教会の前には，貧富を問わず近隣の村人たちの大きな集まりが出来た。[12] 裁判官[13]は，この悲しむべき犯罪を聞き知るや否や，そこへやって来た。着席すべき者が席についた時，裁判官はこう言った，「まことに悲しむべき報告が届いている。誰よりも善良な男が殺されたのだ。」そこに着席していた者のすべてが泣きながら言った，「彼のあだを討たねば，同じ事がまた起るであろう。」(19)

裁判官は老人の子供たちのところへ，そして同時に下手人[14]のところへも使者を送った。彼らがやって来て，裁判官の前に立った時，赤毛の男は笑い，女の方は地面を見つめた。裁判官は，赤毛の男が笑ったのを見た時，こう言った，「極悪人め，我々全員が泣いているのを見て，笑うとは，あの老人をあのようなひどいめにあわせたほどに，なぜお前はそんなに怒ったのか。」赤毛の男は答えた，「わしが姪のそばにおったということだけで，やつはわしの前歯をへし折りやがった。」裁判官は言った，「その女[15]がお前の姪なら，なぜ彼女を冒し，罪に罪をかさねたのか。」赤毛の男は言った，「なぜこのどろぼう女がわしを誘ったのか？なぜわしがそんなことをもくろんでしまったんであろうか？この女がわしにたのまなかった

なら，わしはこんなことをしなかったろう。」女は涙の川が出来るほど泣きじゃくった。そのあと，彼女の目から血の涙が一杯流れ出て来た。[16] 彼女は話が出来るほどまでに気をとり戻してから，こう言った，「ああ，なんという不実な人，なぜあなたは私のことでそんな嘘をつくの。あなたは，エヴァに罪をなすりつけたアダムだわ。ひどい人，私はあなたに来てもらうように人を遣らなかったし，その前にあなたに会った事もないわ。あなたは嘘の約束をして私をだましたわ。私は自分のなしたことを弁護しませんわ，でもあなたがなしたこと，私の勧めでなしたことをおおいに罪あると認めますわ。正直に申しますと，私のために復讐がなされることを望みませんわ。裁判官様，私が自分を告発し，自分を有罪とするまで，すこしの間，判決を引き延ばして下さい。今私はここに自分を罰する裁判官として立っています。私は喜んで罪に服します。もし私が大木に首を掛けられるよう，[17] 判決なさるなら，まず私の髪を切り取り，それを編んで長い綱を作って下さい。その綱で私を締め殺して下さい。私はその髪のためにしばしば罪を犯したのです。[18] でもお願いします，三日後に私の亡骸を降し，焼き，灰を水の中へ漬けて下さい。日輪が光を隠し，風が雨を拒まないためです。それに私のせいで霰が大地をいためたと噂されないためです。もし私を樽の中へ閉じこめて水漬けにするよう判決なさるならば，私が犯した罪を樽の外側に書き記して下さい。私を見つけた人達が私を埋葬しようとしないで，私がすばやく魚や恐ろしいワニに食べられてしまうようにと，樽を壊して，私を川の中に投げ入れるためです。もし私を熱した煙にくすぶる炉に入れるよう判決なさるならば，喜んで従いましょう，地獄の炎で熱せられないためです。どぶに自ら身を投げ入れて，生命を捨てるよう，判決なさるならば，――私は罪深く，そのような罰にふさわしいでしょう――喜んで身を投げ入れるでしょう。地獄の悪臭が絶えまなく私に襲いかからないように，そのようにして果てる方が喜ばしいことです。[19] なおこれ以上のどんな重い罰を判決されても，私は喜んで耐え忍びます。私はたくさんのもっときびしい罰を受けるにふさわしいのです。」彼女がこう言い終ると，裁判官は彼女をふびんと思ってこう言った，「こ

の女は自らを裁いておる。皆の衆はこれに承知か答えてほしい。」すべての者は泣き，彼女をおおいに悔み，こう言った，「裁判官がこれ以上この女のことで問う必要はない。」審判人(20)たちは言った，「この女が己が罪を悔い改めるかぎり，この女の命を助けることに我々は決定した。」小羊のようにおとなしい彼女の継子たちが裁判官の足許に平伏して乞い願った，彼女に生命と慈悲と安寧を与えるように，そして今まで通り屋敷にあって女主人たることを許すようにと。裁判官がやさしそうにこれを約束した時，彼女はこれを拒んで，言った，「今から私のことを女主人ではなく，人殺しと呼んでいただきたい。命を救っていただけるなら，かたわにならなくてすむ体刑を私に加えて下さい。鼻をそいで下さい。歯がみにくく顕わになるように上下の唇を切り裂いて下さい。そうすればこれから誰も私に口付けをしようとしないでしょう。これまで薔薇のように赤く輝いていた私の両頬に十字の形の焼き印を深く押して下さい。(21)　それは私の犯した罪のために印されたと知られ，『なんということだ。お前はそのような罰を受けたのか。』と言われるために，また私のなした大きな罪がまったく罰せられずに済んでしまうことがないためでございます。」それから裁判官は彼女を老人の子供たちにゆだねた。彼女が彼らには以前のように継母ではなく，母であり女主人として扱われるようにと。(88)

彼女はきれいな衣裳と飾り物を取り捨てて，すすで汚れた上衣を身に付けた。髪を切り取り，細い綱を編んだ。それでやわらかな乳房を縛った。綱は強く肉に食い込み，壊疽をおこしてしまった。ぼろぼろの被物が彼女の頭部全体をおおっていた。そのため彼女の鼻と目以外には何も見えなかった。彼女は詩篇を学び，それを老人の霊のために歌った。夜になるまで(22)何も口にしなかった――それから，黒い，灰のまじった何も付いていないパンを食べた――それにスプーン三杯の水を飲むだけであった。寒い時も暑い時も素足で歩き，もみ穀のほか何も敷かれていず，羽まくらの代りに木を置いただけのベットで眠った。日の出まえに起き，老人の墓に出かけた。そこで汗がにじみ出て，そこにもはや立っていることが出来なかった。それから顔を伏し，泣いてそこに涙の流れを作った。雪が降って

も，雨が降っても，あるいは灼熱の太陽が照りつけても，教会の鐘が鳴ると，教会へ出かけて行き，あたりが明かるくなるまでそこを出なかった。それから家に戻って，顔を洗い，司祭がミサを祝うために鐘を鳴らすまで，少しの間家に留まっていた。それからまた教会へ引っ返し，その後そこに九時課(23)までいた。いかなる主人としての権力も行使せず，それを継子たちにまかせた。継子たちから与えられる物だけを所有して，与えられない物は何も要求しなかった。決して笑うことがなく，また誰とも冗談をかわさなかった。ほかの人たちが笑っている時，甘い涙を流した。その後死ぬまで彼女が怒り，争い，ぜいたくをする姿は見られなかった。(117)

彼女が彼女の継子たちに託され，彼らに引き取られると，裁判官は人々に向かって言った，「我々を悲しませたこの二重の罪を犯した赤毛の男をいかに処断すべきか言ってほしい。」赤毛の男は，死刑の判決はまちがいないと思い，こう言った，「お願いがある。この地にわしの連れの者がいる。この罪がいかなる罰になるかと尋ねる前に，その男を呼んでほしい。その男は，わしがいかなる素生の者か，あなたたちに十分に語ることが出来よう。」人々がその男（ルオドリエプ）のことを知りたがって，その男のところへ使いを送ることを望んだ時，騎士（ルオドリエプ）が留まっている家の主人が言った，「その人はじきにここへ来ます。昨晩わたしの家に留まられました。赤毛の男は一緒ではありませんでした。」彼がルオドリエプを前に導いた時，裁判官は彼に尋ねた，「言って下され，高貴なる騎士殿，この男はあなたのお知り合いですか。」(129)

〔赤毛の男は有罪の判決を受け，死刑に処せられる。〕(24)

断　篇　IX

〔ルオドリエプは帰路にあって，同じように旅をしている甥に出会う。ルオドリエプは彼を情婦のところから引き離し，祖国へ連れて帰ろうとする。だが甥はためらい，情婦との関係を告白しようとする。ルオドリエプはこれを押しとどめて，次のように言う〕，(25)「………時が来れば，お前はすべてを言ってしまってもいいだろう。今はお前と小姓のために馬にくつ

わをはめるよう命じるがよい。なぜなら，国の人たちはわしよりお前の方をよく知っている。彼らがお前に会ったら，わしの事には全く気づかないだろう。お前がわしに好意を寄せてくれるならば，お前は国へ戻らねばならぬ。」たちまち甥の胸は高鳴り，喜びのあまりに涙を流した。「泣くのは止めろ」と騎士（ルオドリエプ）は言った………

断　篇　X

〔ルオドリエプは甥を説得して，二人の小姓に伴なわれて，甥と祖国へ向う。彼らはある城にやって来た。そこには，やもめの女主人が娘と住んでいた。その女主人はルオドリエプの母の知己であった。〕(26) 近くの人目のつかない所に一室があった……その壁にはたくさんの釘が打ちつけられていて，旅人は何でもそれに掛けることが出来た。ここでは盗人を恐れなくてもよいが，ねずみにあらされないためである。女主人はルオドリエプとその甥と共に高いバルコニー(27)に上り，そこで彼らに，「よくいらっしゃいました」と言った。彼らが礼を言った時，彼女は，彼らに腰を下ろして楽しむよう促した。〔以下20行にわたって欠落部分や1行につき2，3語しか現われていないので解読不明，だが次のような内容と推測される：ルオドリエプはまた牛の舌草を使って魚をとる技を披露する。こうして婦人たちを楽しませる。〕……魚が浮かび上がった時，丸薬を食べた……魚が食べ終ると，水の中へもぐることが出来なくなった……ルオドリエプは棒を使って魚をおどろかせ，岸へ追いやった。女主人と大勢の貴婦人たちは驚嘆し，ルオドリエプの甥はこのみごとな技に小おどりして喜んだ。大いに笑いと拍手が起った。料理人たちがかけ寄り，魚を運び，料理するために急いだ。ルオドリエプは小船からおり立ち，すべての人たちに伴なわれ，女主人のもとへ戻った，彼女は彼を愛想よく迎え，こう言った，「あなたのようにして魚を獲るのを初めて見ました。」ルオドリエプは，この池からどれほど多くの種類の魚がとれるかを見るために，魚を柔かな芝生の上にならべさせた。それで獲えられただけの魚がならべられた。(28) カワカマス(29)とベニマス(30)，これらは魚の中で狼である。というのは，こ

れらはほかの魚を捕えると食べてしまうからである。フナ(31)，サケ(32)，コイ(33)，テンチ(34)，ニゴイ(35)，ヒゴイ(36)，ウグイ(37)，ハナゴイ(38)，この二つはたいそう小骨が多い。底に住むカワメンタイ(39)，赤と白の二種類のマス(40)，頭が大きく，尾ひれの退化したハゼ(41)，すべってつかみにくいウナギ(42)，グロテスクな頭のナマズ(43)，カワヒメマス(44)，ラインマス(45)，この二つは実にうまい。それに鋭い針が背にささっているようなスズキ(46)。さらに私のよく知らない多くの魚が。女主人はこれらをながめてから，さっそく運んで料理の用意をするように命じた。食卓が用意され，その上に白パンが(47)積み上げられた。この間，女主人は自分の娘にすぐ来るようにと，使いを走らせた。ただちに多くのすばしこい召使い(48)たちが彼女のところへ走った。彼女は，キリストの恵みによっていつの日にか授けられるであろう花婿のために二つの腨当を金糸で織っていた。彼女が姿を現わすと，明るい月のように輝いた(49)。どんな利口な者でも，彼女が飛んだのか，泳いだのか，どのように身を動かせたのか，はっきり見ることが出来なかったであろう。〔……女主人は客を食卓に招く。〕(50)女主人は水を持ってこさせ，姫にすすぐように命じた。そして次に客に回され，最後に女主人自らがすすいだ………ルオドリエプは女主人のとなりに，ルオドリエプの甥は姫のとなりにすわった。(51)………こうして姫はルオドリエプの甥の相手役となった。彼らのところに一つの大杯と，さらに一つの大皿が運ばれてきた。彼らのそばには，どんなどろぼうでも嗅ぎ出せる犬がいた。………首を後に向け，尾を振ってこび，食べ物を分けてもらいたそうにした。ルオドリエプの甥が故意にやった物なら何でも受け取った。しかし偶然に落とした物は拾わなかった。しかし彼が『悪い奴が料理したが，食べよ』と言って食べ物をやっても，決して口にしなかったか，あるいは口にしても吐き出してしまった……料理長(52)がルオドリエプの拍車革を盗んだ。その後で，この料理長が，ただちに自分に皿を，給仕人の作方通りに手渡すよう命じた時，……ルオドリエプの犬はこの者をしきりににらみ，ついにとびかかり，衣服をひき裂いた。もし小姓が引き離さなかったならば，かみつかれていたであろう。ルオドリエ

プは笑った。他の召使いたちはみな打ち驚いていた。そこで女主人はこう言った，「これは不思議なことですわ。」ルオドリエプは盗人に言った，「この犬はお前が盗んだことを知っているんだ。お前が盗んだ物を返さなければ，お前は死ぬことになるんだ。行け，お前が盗んだ物を人目のつく所へすぐに戻しておけ。」この者は駆け出して，ためらうことなく二つの拍車革を戻した。この者はこう言った，「これをさっきあなたの鞍からはずしました。その時そこには誰もいず，誰も見ていませんでした。この犬も，悪霊から教えられなかったならば，知らなかったでしょう。」ルオドリエプは言った，「その拍車革を犬に渡せ，それで犬がそれを誰のところへ持っていくか見るがよい。」彼がそれを犬のところへ投げると，犬は元の持主のところへ運んだ。それで彼は犬に向かって言った，「さあこれをわしの連れ[53] のところへ持っていってくれ。」犬は何度も何度も尾を振りながらそれを小姓に渡した。ルオドリエプは犬に言った，「盗人の足許に伏して，許しを乞え。」犬は身を投げ出し，盗人の足の間に頭をつっこみ，泣いているかのように唸って許しを乞うた。ルオドリエプは盗人に言った，「さあ犬にこう言うがよい，『立ってくれ，そして前のように友達になろう。』」料理長がこう言うと，犬は立ち上がって，喜び，この者に，主人に[54]，同席している人たちに尽くそうとした。ルオドリエプは言った，「お前たち[55]の誰かがこの盗人の髪をつかみ，棍棒を手にせよ，罪を罰するように。」二人の者がその通りにして，「なぜお前は盗んだのか」と言った時，犬は二人にとびかかり，彼を二人から引き離し，二人のふくらはぎにかみついた。それで二人は，犬と仲良しになった者をかくもあざけたことをひどく後悔した。ある者は笑い，ある者はたいそう驚いた。朝食も夕食[56]もあふれるばかりの馳走がだされた。たくさんの料理，同じくたくさんの飲み物[57] のあとで，水[58] が出された。飲み物を飲みながらもうしばらくの間席についていた。今は果物の季節ではなかったが，召使いたちが森から野苺を摘んで来た。器に入れられたり，はしばみの皮に包まれていた。ひとりひとりが色んなところから摘み取って来たのだ。野苺を食べ終ると，食卓がかたずけられ，水が出された。〔ルオドリエプと甥は席を立

った。〕[59] 二人は靴を脱ぎに行った。[60] ルオドリエプはルッカ[61]で買った臑当をすねに巻いた………[62] そして靴下の上に絹製の靴をはいた。彼の甥はやぎ革の靴[63] の下に赤い靴下をはいていた………彼は両脚を二本の紐で縛った。この紐にはたくさんの鈴が付いていた[64]。それから彼はまだらの毛皮の短コート[65] を着た。これは前と後に切れ目があり，すそはぐるりと赤い毛皮で飾られていた………この上に毛皮の長コート[66] をまとった。これは黒いビーバーの毛皮で広く縁取りがしてあった。彼は姫が彼に贈った指輪を手にとった。それはかろうじて一番細い指にはまった………洗いのよくない下着，古くなったためそして汗のために黒ずんだ貂の毛皮コートを………まもなくルオドリエプと甥は女主人たちのところへ戻った。彼女たちは窓際に立って，外をながめていた。(132)

断　篇　XI

〔二人の貴婦人と二人の騎士はいろいろと楽しむ。彼らは庭の鳥籠を見る。鳥籠の中にコガラスが飼われている〕[67]，それから親鳥は十二分にえさを食べ，ひな鳥に与えた。鳥籠の隙間から少量の食物を入れると，そろってさっと口ばしを開けて近より，つかみ得るものに一生懸命食いつこうとした。しばらくすると小鳥たちはすぐにこれに慣れてしまった。その後で，鳥籠の扉が開かれると，人の手にのって，与えられるものを口にした。腹いっぱいになって，手でなでてもらい滑らかになると，すぐに競って鳥籠に戻り，とまり木に止まって口ばしで羽を整えた。小鳥たちは一日中黙っていることがないほど楽しんでいた。これらすべての事は老人たちにはたいそう不快なことであったが，若い姫にはすばらしい楽しみであった。ムクドリの鳥籠にはえさも，水もなかった。それは空腹になれば，隙間からえさを入れてもらうよう乞わせるためであった。老いた親鳥は最初はこれを拒んだ。親鳥がひな鳥に何も与えなかった時，ひな鳥はすぐに差し入れられた指に向かって口ばしを大きく開けた。この小鳥たちの中から人間の言葉[68]で話し，「主の祈り」[69] を「天にいます」[70] まで「リース，リース，リース，」[71] と三度繰り返して唱えられるようにほかの鳥に教え

るために賢い雌のムクドリ(72)が選ばれた。このムクドリ姉さんは，「歌え歌え」(73) を繰り返すように教えることになった。これをひな鳥は親鳥よりも早く覚えた。(24)

そうこうする間，ルオドリエプと甥は女主人と共に竪琴弾き(74)たちがかなでているところへ赴いた。彼らの中でこの芸に優れているとはいえ，つたなく弾じているのを，ルオドリエプが聞いた時，彼は女主人に，ここには他の竪琴があるのかと尋ねた。彼女はこう答えた,「ここに一つの竪琴がありますが，これ以上のものはありすまい。夫が生存中弾じていたものです。その響きによって私の心は愛のために病んだのでした。夫が亡くなってから，誰もこれに触れておりませぬ。あなたが欲するならばこれを弾いてもかまいませぬ。」彼女はこの竪琴を彼のところへ持って来るように命じた。彼は急いで調子を合わせようとした。……テキスト二行欠落……ある時には左手の二本の指で，ある時には右手で弦に触れ，たいそう甘美な曲を奏でた。非常にはっきりと色々と変化を加えて弾じたので，足を動かして踊ったり,手で拍子を取ったりすることを全く知らない者も,この両方をすばやく覚えこんでしまうほどであった。先ほどまで向う見ずに，剽軽に弦に触れていた者たちは，今や静かに聴き入り，弾じようとはしなかった。こうして三つの妙なる曲をいとも甘美に弾じ終ると，女主人は四曲目を弾くように彼に求めた。姫も彼にそう願った。曲に合せてルオドリエプの甥と姫が踊るようにと，ルオドリエプが音階と音程を調じて，みごとに優雅に弾いていると，ルオドリエプの甥が立ち上がった，次いで姫も彼と向き合って立った。彼は鷹の如くに，彼女は燕の如くに回わった。(75) だ二人が相会うと，またさっと離れた。彼の方ははね回っているように，彼女の方は泳いでいるように思われた。それで誰も自分の思い通りに彼らが踊ったり，手で拍手を取ったりしなかっても，それに文句を言うことが出来なかった。それから彼らは手を下げて，踊りが終ったことの合図とした。これはそこに居る人々に惜しまれた。二人は一緒に腰を下ろし，お互いに激しく燃え立ち，法的な婚姻によって結ばれたいと願った。姫の母はそうならんことを願い，二人が望みのことを互いに話し合う機会を与え

た。姫は彼に，さいころゲームの相手をするように乞うた，三度勝った方に負けた方が指輪を贈るという条件をつけて。それで彼はこう言った，「今から勝負をして最初に勝った方が両方の指輪を手に入れることにしましょう。」彼女はこれに同意し，勝負をして彼を打ち負かした。彼は好んで破れ，彼女に指輪を渡した。こうして彼女は勝利を得たことを，大いに喜んだ，が次の勝負ですばやく自分の指輪を失なった。それを彼女は指からはずし，彼の方へころがして渡した。この指輪の内側の真中に，くぼんだ結び目があった。これをほどかなかったならば，彼は自分の指にはめることが出来なかったであろう。(72)

断　篇　XII

〔女主人とルオドリエプは甥のこと，彼女がすでに知っているルオドリエプの母のことなどを語り合う〕(76)，「さあ，奥方さま，言って下され，最近私の母にお会いになりましたか，母は元気に，恙なく暮らしていますか(77)。母はあなたの代母ですので，あなたが名付けられた兄弟が私に出来ましたか，(78) それとも母はお嬢様の名付親になったのですか。」女主人はルオドリエプのこの言葉にひどく驚いて，こう言った，「まあ，なんと言うことをおっしゃるの！お母さまが再婚なされたと思っているの。お母さまはあなたがいなくては楽しく暮していけないのに。お母さまはあなたを思って泣き，今では目が弱っていらっしゃるんですから。お母さまは私の娘の名付親になって下さり，それ以来私たち二人を娘のように思って下さるです。しばしば私たちを訪れて，その時には何かと持って来て下さいます。」騎士ルオドリエプはこれを聞くと，母を憐れと思い，涙を流して言った，「今週中に国許に帰り着くことが出来ましょうか？」彼女は答えた。「明日の夕には，あなたは大切なお母さまに会うことが出来ましょう。でも私が一番にお母さまのところで使者の礼を(79)いただきたいですわ。」ルオドリエプが女主人の名付親の息子であることが知れ渡った。召使いたちの間にただちに大きな喜びが起った。彼らは息子の無事な帰国を母と喜びを共にしたのだ。それから女主人は使者を送り，名付親にこう告げるよう

彼に命じた，御子息はただちに帰郷せんとしておられると。(21)

この間に若者と姫はずっと勝負を続けていた。彼女は彼に三度勝ち，彼の方も同じだけ彼女を打ち負かした。二人はお互いに負れて，契約のきざしを喜んだ。[80] なぜなら彼は乙女のもの，乙女は若者のものとなった。二人は勝つことではなく，負けたことを喜んだ。彼らは互いに，彼女は彼のもの，彼は彼女のもの[81]，と性を取り換え，文法を無視して呼び合った。二人は互いに激しく愛しあっていることを，彼女の母が許したならば，その日の夜のうちにも一緒になるであろうことをも，隠さなかった。もしそれが二人の恥にならなかったならば，彼女は許していたであろう。それで乙女は待つことになんとか納得した。(32)

〔二人の婚礼の手筈が整えられてから，ルオドリエプと甥は国へ向かって旅立つ。〕[82]

〔ルオドリエプは彼の母が送った三人の使いに出会う。一人の召使いがルオドリエプの到着を桜の木の上からながめている。〕[83] 召使いは木に腰をかけて，そこから見張っていて，目の前に垂れ下がっている桜坊をちぎろうとはしなかった。誰よりも先に主人の帰りを知らせようとしたのだ。枝にとまっていたコガラスは，召使いが何をなし，なぜ桜坊をちぎろうとしなかったかを知ろうとし，彼が何をなし，何を言ったかを，あとでルオドリエプの母に告げるために，見張っていた。召使いは，主人が馬に乗って近づいて来るのを見る方を望んだのだ。彼はたえずこう一人言を言っていた，「ルオドリエプ様，急いで，お戻り下さい。」コガラスがこれを聞いて，ルオドリエプの母の許へとってかえし，彼女にこう言った，「どうか私が言うことを聞いて下さい。」彼女は言った「話しなさい。」「ルオドリエプ様，急いで，お戻り下さい。」召使いたちは，ルオドリエプの母が溜息をついているのを見ても，コガラスがそんなことを見たことをあざ笑った。ルオドリエプの母はコガラスに言った，「戻って，召使いのいる上にとまりなさい。あの者が言うことに耳を傾けなさい。あの者が叫べば，お前も叫びなさい」コガラスはルオドリエプの到着を待ち望んでいる召使いの言葉に耳を傾けた………召使いは，仲間が密なる森から現れるのを見

た。まずルオドリエプの甥と，彼に並んで彼の小姓が。最後に主人と彼の従者がやって来た………それで召使いは叫んだ，「喜びなされ，御主人様が近づいてこられます。」(90)

断　篇　XIII

〔ルオドリエプが到着する前に，コガラスがルオドリエプの母にこの知らせを告げる。ルオドリエプは祝宴を計画する。ルオドリエプと甥はその準備をする〕(84) ルオドリエプの甥は一本の髭さえ残らないほどきれいに剃ってしまった。そのため，彼が僧か，婦人か，あるいはまだ髭の生えていない少年であるか見分けがつかないほどであった。それほど彼の顔立ちはやさしく，乙女のようであった。彼らが髭を剃り，体の汚れを水でおとし，浴槽(85)から出た。すぐに小姓が彼らに浴用衣(86)をかけた。二人はこれを着て，体が乾き，熱気がなくなるまで横たわっていた。しばらくしてから，起き上がり，靴を持ってこさせた。(9)

かくしてルオドリエプ(87)は食卓についた………だが彼は上席に付こうとせずに，母の右側にひかえ目に客同様に腰をかけ，喜んで主人役の一切を母にまかせた。母が彼に与えたものを彼はうやうやしくいただいた。母はパンを切り，それをすべての人々に分けた。馳走を盛った皿とぶどう酒のはいった杯を各人に回した。時々はちみつ酒も回した。ルオドリエプの甥は彼と隣席した。二人は一つのパンを食べ，一つの皿から食べ，一つの杯から共に飲んだ。母のパートナーはいつもコガラスだけであった。彼女がコガラスにパンくずを丸めてやると，コガラスはそれを取って，誇らしげに歩き回り，食卓の上をななめにすっと飛んで行った。多くの料理とそれに続く多くの飲み物のあとで，ルオドリエプの母は水を求めた。すると召使いが水を運んで来た。彼女はそれぞれの食卓の貴族の銘々に水を出すように命じた。そのあとで酌人(88)たちが次々と飲物を注いで回った。食卓が片付けられ，卓布がたたまれると，客人たちは気分をよくして立ち上がり，女主人に礼を述べた。そしてルオドリエプ殿が母上様をなぐさめるために無事に戻られ，以前のように御子息がおられないために悲しまれることは

これから先ありえぬことは喜ばしいことすで，と言った。ルオドリエプがずいぶん豊かになって戻って来たことが，すばやく国中に知れ渡った。(34)

このあと，いいことに，ルオドリエプは一人になったので，愛する母と一緒に自分の部屋に入り，旅嚢を持って来るよう小姓に命じた。そこからルオドリエプはたくさんの高価な品，すなわち毛皮の長コート，短コート，それから十年間の遍歴の間に得たそのほか貴重な品々を取り出した。そのあとで，小姓が運んで来た二つの袋を持って来るように告げた。アフリカ人たち(89)のもとで作られたパンを取り出すようにこの者に命じた。小姓がこれを取り出した時，ルオドリエプは楽しそうに母にこう言った，「母上，これを今までおりました地で手に入れました。王がこれを下さり，母上の前で切れとのことでした。」母はこう言った，「まず召使いを呼び，このアフリカのパンがどんなにおいしいか，彼らに確かめさせましょう。」ルオドリエプは言った，「我々だけで確かめた方がよいと思います。」ルオドリエプは小刀を抜いて，一個のパンを切った。彼は銀の皿に気づいた。その中には黄金が詰められていた。彼は小麦の細かい粉を払いのけ，銀の輝きが現われた時，三つの個所を釘で留めた皿に気づき，すばやく釘の頭をやすりで摩り落とし，皿を開けた。するとそこには，もはや一枚すらも押し込むことが出来ないほどぎっしりと金貨が詰められていた。ルオドリエプは小躍りして喜び，主に感謝した。彼はためらうことなく，もう一つの同じ型の皿を手に取り，(90) 小麦粉を払い，釘を短くやすりで摩り削った。すると，金貨と，種々な宝石がぎっしり詰められているのを見て，うち驚いた。ルオドリエプの母はおおいに喜んだ，それから彼女はため息の声をあげたが，心は晴れやかで，目に涙をため，息子をかくも財豊かにして，かくも恵まれて戻してくれたことを天なるキリストに感謝した。騎士ルオドリエプは地に身を伏せ，何度も口付けをした，あたかも彼の主人なる王の足許に平伏すが如くに。それから彼は激しく泣き，顔を涙でぬらし，こう祈った，「主よ，この哀れなる男を隣みをもてかくも財豊かにし，誉れを与え給うお方はあなたをおいてほかに誰がいることでしょうか。この男の悪徳によってもあなたがこうむったことを思い出されることはない

でしょう。主よ，今や祈願します。私が貧しく，苦境にあった時赴いたかの王に私の生命がある間に再び会えることを。王は，主よ，あなたの命令で私を親切に迎え，多くの楽しみを与えてくれました。この貧しい私を十年の間手許に置き，私がこれから先大層誉れを得，志操堅固に生きて行くことが出来るように――もし私がこれらを賢く保つならば――と私を富ませてくれました。」ルオドリエプと母はこれらの宝物におおいに喜んでから，皿を出来るだけ用心深く閉ざした。それから二人は彼が一緒に運んできた他の宝を手に取った。多くの若い召使いたちが走りよって来た。(81)

断　篇　XIV

〔ルオドリエプは甥の婚礼の準備をする。母に招待客のことで相談する〕,[91]「………親しい縁者の方々が到着した時，婚礼がなされるように致しましょう。さあさあ姫のお互いのなじみの人々を招いて下さい。」姫が到着し，これらの人々が彼女のまわりに集まった時，中庭は親しい人々でたちまち一杯になった。ルオドリエプは彼らを愛想よく迎え，口付けをした。それから彼は彼らに朝食を推め，たっぷりとふるまった。食卓が片付けられ，貴婦人たちが閨房へ戻る時に，かの姫が婦人たちの先に立って歩いた。彼女たちの後を，彼女たちのために羽根まくらを運ぶ人たちがついていった。そしてその他の多くの人たちが，彼女たちに仕えるために従った。ルオドリエプはねぎらいとしてこの者たちのところへぶどう酒を運ぶように命じた。各人が銘々に飲むと，次にその隣の者に勧め，ついに酌人に空になった杯を戻すに至った。彼らはお辞儀をし，そこを辞し，ルオドリエプと主人たちのところへ再び戻った。(17)

それからルオドリエプは語った,「神があなたがたをここへお集めになったが故，さあ聞いて下され。すでにまとまり,[92] 我々に託かされた婚姻が今や成立するように力を貸して下され。[93] このためにあなたがたが証人として居並んで下され。この私の若い甥と姫は，ゲームをした時に，互いに愛しあうようになりました。二人は正当な結婚によって結ばれたいと願っています。」そこで皆は言った,「我々は皆そろって手びきしなけれ

ばなるまい，かくも有能にしてかくも徳性豊かな男の誉れが失なわれないように，火で焼かれるに十二分に値する賤しい女からいちはやく遠ざけられるようにと。」(94) この世のどこかに，彼を魔女(95)から引き離すことの出来る婦人がいたことで，彼らは主を称えた。それから若者は立ち上がって皆がこぞって自分にかくも親切にしてくれたことで，礼を述べ，自分はたいそう心おののき，あの罪つくりな女のために名誉を汚されたことを，恥じているとし，こう言った，「私には妻がどうしても必要であることを，あなたがたはおわかりになった。我々が今ここで妻を見つけることは簡単であるが故，この婦人を妻にめとりたく願っています。しきたり通りに，我々が互いに婚礼の贈物を交わしたら，どうか皆の衆，証人になってくだされ。」(96) 彼らは言った，「我々は進んであなたの手助けをいたすでしょう。」ルオドリエプは三人の貴婦人のもとへ同時に使いを送った。彼女たちはさっそく姫を先頭にしてしずしずとやって来た。一同は彼女たちに敬意を表するために向かいあって立ち上がった。すべての者が腰を下ろし，しばらくの間沈黙が続いた後，ルオドリエプは立ち上がり，自分の言うことを聞いてくれるように願った。その後で彼は親族と友人に，新郎新婦の契りについて，そして二人は互いの愛に燃えたっていると告げた。彼らは尋ねた，この女を妻に娶りたいかと………テキスト二行欠落………彼らは尋ねた，この男を夫にしたいかと。彼女は少しほほえんでから，こう言った，「勝ち負けにかかわらず，私とだけ結婚しなければならぬという言質をとってさいころで私に負かされた奴隷を私は拒むべきではないでしょう。この人が昼も夜も私に一生懸命奉仕してくださることを願っています。そうしてくだされぱくださるほど，私にとっていとしい人になるのです。」彼女がかくも大胆に，かくもなつっこく話したが故に，どっと笑いが起った。彼女の母が結婚に反対せず，また両家が力においても財においても同等であることを彼らが確認した時，二人が似合いであることを注意深く確定し，彼女は結婚の法に従って，彼にめとられるよう，決定した。新郎は剣を抜き，階段の柱でこすった。(97) この剣の柄に黄金の指輪が付けられていた，それを新郎は新婦に渡し，彼女にこう言った，「この指輪

が指全体をぐるりと取り巻くように，私はあなたに固くてかつ永遠の貞節を求める。これをあなたは私に対して守らねばならない，さもないとあなたは首を切られることになる。」彼女は若者にたいそう賢く，当を得た答え方をした，「二人が共に同じ判決に服するのがふさわしいことです。どうしてあなたが私に対するよりも，私があなたに対して一層の貞節を守らなければならないのですか？神があばら骨から一人の女をお造りになった時，エヴァののほかに愛人を持つことがアダムに許されたと，思っていらっしゃるの。自分からエヴァが造られたと，アダムが叫んだ時，彼に二人のエヴァが与えられたと，どこかでお読みになったんですか，答えてちょうだい。あなたが色事にかかわっている時，私があなたには娼婦であった方がいいんですか。私はあなたに対する貞節に縛られたくありません。ここから立ち去って下さい。さようなら，あなたがどんなに娼婦を買いたいと思っても，私には無関係です。あなたぐらいの人と私がたやすく結婚できる男たちはこの世にはたくさんいます。」彼女はこう言って剣と指輪を彼に渡した。若者は彼女にこう言った，「愛する女人よ，あなたの思うようにするがよい。もし私が誤りをおかすならば，あなたに渡した財産を私は失なうことになり，そしてあなたは私のこの首を切りとることが出来よう。」彼女はかすかに笑い彼の方を向いてこう言った，「この掟に従い，本心から一緒になりましょう。」彼女の求婚者は「アーメン」と言い，彼女に口付けをした。(87)

こうして二人が一緒になると，人々の間から大きな同意の声が起った。人々は主を称え，婚礼の歌を歌った。ルオドリエプは花婿にみごとに緋色で縁どられた毛皮の短コートとすそ飾りが地にふれてかさかさと音をたてる長コートを贈った。またみごとな馬勒を付けた駿馬も贈った。彼は自分の縁者と結ばれた花嫁にも贈物をした。彼女に美しい胸をおおうブローチを三個，みごとに手の加えられた腕輪を四個，同じく宝石で飾られた指輪を三個，それに緋の布地の張られたイタチの毛皮コートを贈った。ほかの人々も彼らに大層の贈り物をした。二人が互いにいかにむつまじく暮したか，私が何を心配する必要があろうか。

断　篇　XV

〔ルオドリエプの甥の婚礼の後，ルオドリエプの母はルオドリエプに嫁を迎えさせるにはどうしたらよいかと思い巡り，次のように言う〕，[98]「とどまるところを知らない（老年）はすべてを一様に圧倒するものです。月に似て若さに花咲く女も年をとれば老いた猿に似るものです。かつてはなめらかであったが今はしわの寄った額，かつては澄んでいたが今は曇った目。鼻汁だらけの鼻は汚物を滴らします。かつては油ぎっていた頬は今はたるんでいます。長めの歯は今にも抜け落ちそうにゆるみ，その間から話をする時に言葉を押し出し，あたかも口の中が麦粉で一杯かのようにしゃべります。あごは曲がって，上を向き，多くの人を誘った笑みを浮かべた口はいつも開きぱなしとなり，人々を恐れさせるに十分です。細い首は羽をむしりとられたかささぎのようです。かつてふくらんだまりのように突き出していた胸は，汁のなくなったきのこのようにたるんでたれさがっています。かつて別れ別れにお下げ髪に編んで背中をつつみ，腰までたれていた金色の髪は，今は恐ろしく逆立ち，見る人を恐ろしがらせます，あたかも頭が柵をつらぬいて，後へ引っ張られるように。死体が横たわっているのを見たら，かがんで，のろまなはげたかのように突き出した肩で頭を隠すんです。若い時に帯をはずして歩くのを常としていても，今は服を汚さないために，帯で高くからげます，まるでかゆを作るために豆をすりつぶすかのように。かつてたいそう細かった靴は，今は靴下によって広くなり，つるはしのように先が曲がって，歩く時にいっぱい泥をひっかけます。かつて脂肪で丸々としており，みずみずしかった指は，細くなり，肉は落ちて，骨っぽく，節はしわが寄り，すすで汚れ，爪は長く伸びて，あかで黒ずんでいるんです。このように婦人の場合と同じく，老年は元気のよい若者をも圧するのです。〔……以下23行にわたって断片のため解読不能，ルオドリエプの母は男の老年について詳細に語っているものと思われる。〕死よ，汝人間の悪の唯一の終りよ，汝，汝はなぜ私のところへこんなに遅くやってくるんですか？汝はなぜ私を牢獄から解き放なたないので

すか？おお，死よ，疲弊と苦痛から私を解放して下さい。この生が死であるとはいえ，これらを耐えねばなりません，神が命じて魂が去るまで。なぜならばこの法則が存在するものすべてを制しています，飛ぶものであろうと，歩くものであろうと，泳ぐものであろうと。初めを持つものは終りを持つでしょう。」このように弱って，死を逃れることが出来ない母は何度もルオドリエプをさとすことをやめなかった。(66)

断　篇　XVI

〔ルオドリエプの母は息子に嫁を迎えることを勧めて，言う〕，「お前に息子が出来なければ，跡継ぎはないことになる。息子よ，子供がおらずにお前が死ねばどうなることでしょう。我々の財産のことで一悶着起るでしょう。私には若い力はありません，なぜならばお前がアフリカ人の許にいた十年の間，毎日絶えず不安にさいなまれていました。お前がいないことを嘆き悲しみ，財産を守っていました。お前が戻ってこなかったら，私はとっくに盲になっていたでしょう。でもお前が戻ったのを知った時，若々しい気分に戻りました。今は私の力の及ぶ以上に身を保っています。もしお前が望むならば，我々は今や縁者として信義厚い友達を招こうと思っています。彼らの助言と忠実な助けによってお前は女を妻に見い出すでしょう。彼女についてはお前は，彼女の縁者が父方においても母方においても，今度お前たちの子孫が決してびっこにならず，彼らのふるまいによってお前の誉れがおとしめられないものであることを知っておる。慈悲深き神が彼女を示し，めあわせて下さいますように。」ルオドリエプは答え，母にしごく穏やかに言った，「明日縁者と友人たちを呼びにやりましょう，彼らが出来るだけ早く来るように。彼らが私に助言を与えることが，妥当だと母上がお考えになれば，お望みの通りに致しましょう」(23)

使者が遣わされ，友人たちが集まった。彼らが到着し，心よく迎えられた。各人が指定のどの席に座ったらよいかをルオドリエプはよく知っていて，席を配置した。二人につき一つの卓をわりあて，母のためには高い席を設けるよう命じた，彼女がそこに居るすべての人々を見渡すことができ

るようにと，そして一人で食事が出来るように，こうして女主人として見做されるようにと。こうしてルオドリエプは母を敬い，主人として扱って，人々から賞賛を，しかし神からは王冠と永遠の至福なる生を得た。彼は食事を終えると食卓を片付けるよう命じた。扉が閉ざされ，二人の屈強な男がその番をして，会議が終るまで，いかなる者の出入りを許さなかった。それからルオドリエプは立ち上がって，何のために集まってもらったかを，告げねばならないから，少し静かにしてほしいと皆にたのんだ。彼らが静まると，彼の母が彼に助言した通りにこう言った，「さあ聞いて下され。縁者の方々と友人たちよ！母が，私の父と私を奪われ，なんという大きな悲しみ，なんという苦悩によって多くを耐えしのび，すべてを気づかってきたか，あなたがたには明らかです。今や母の体力はおとろえ，肢体は弱っています。今後は今までのようにはもはや出来ません。母は私にそれをしばしば語っていますし，私も見ています。それ故，母は私に結婚を勧めることを止めません。それ故，今やあなたがたに来ていただくためにあなたがたの許へ使者を送りました。おのおの方は思案して，私に助言していただきたい。なぜならば私はほんの少しの婦人しか知りません。どのようにやっていったら良いのか私にはわかりません。我々の一門をはずかしめることなく，人柄と生れながらの高貴な生命によってかえって輝かすような妻をあなたが我々のために見つけることが出来るかどうか，このことであなたがたが出来ることを私に言って下さい。」彼らはこぞって答えた，「喜んでそういたしましょう，キリストがあなたに与え，それがため賛えられた人柄，徳，財産の相続人として愛しい息子があなたに生まれるのを我々が見るために。」銘々はうなづいて同意し，そうすることを約束した。一人の者が立ち上がった，この者は土地に通じており，そこに来ていた高貴な人々をよく知っていた，彼はこう言った，「高潔な人柄において，徳において，高貴さにおいてあなたにふさわしい一人の婦人を私は知っています。あなたが彼女と会うことを私は望みます，彼女に会ったら，かくも熱心に徳をみがいている婦人をこの世で見たことがないとあなたが告白するように。それで彼女はどんな男であろうともその男にふさわ

しいであろうようなそんな女となるでしょう。」

断　篇　XVII

〔ルオドリエプはその婦人のことを考えることに同意する。しかし彼女がある僧と情事関係にあることを知る。その上彼女が密会の時に残していった帽子と靴下止めを手に入れる，彼は結婚の申し込みのための使者を彼女の許へ送る，そのさい先の品を入れた小箱を，中身を教えずに携えさす。使者は求婚とその答えをもらったあとで箱を彼女に手渡すことになっていた。使者は気持よく迎えられる。〕(99) 彼女は今や杯に最良のぶどう酒と何度も甘い蜜酒を運んで来て，立って，彼の国の娘たちについて尋ねた，彼女たちの世評はどうか，彼女たちは美しくて，上品かと。彼は笑って答えた，「あなたが問うていることは，私には全くわかりません。婦人たちが何をしているか全く私は関心を払っておりません。そんな事はしゃれ男にまかせておきます。私が道を通って婦人を見かけると，彼女たちにおじぎをし，私の行きたい方へ行きます。あなたは私を通じてルオドリエプ殿にどう答えられますか？」彼女は言った，「私のまことの心からあの人に伝えて下さい，木の葉と同じほど多くの好意を。鳥の喜びと同じだけ多くの愛を伝えて下さい。草と花と同じだけ多くの誉れを伝えて下さい。」この使者は，彼女がルオドリエプと結ばれることが出来ることを決して疑わなかった。彼が帰らせてほしいと願った時，彼は突然口がきけないようになった，そしてあたかもびっくりしたようになって，ため息口調でかろうじてこう言った，「何が私に起ったのでしょうか，いかに悪く，いかにいまわしく。それを話すのは恥づかしいことです。誰にもこれ以上悪いことは起りません。なぜならばルオドリエプ殿はあなたに封をした小さな贈物を贈られました。」彼は靴の中から小箱をとり出した。その中に贈物がはいっていた。彼女はこれを受け取ると，急いで彼の許から離れ，窓のところに立って小箱をあけた。その中に，ルオドリエプの指輪の四つの封印できちんと留められた美しい布が入っているのを見た時，それが何であるかと，大いにいぶかって，封印を破り，布の結びを解いた。結び合わされ

た美しい緋色の布を見た時，これを広げた。するとそこに頭飾り[100]とひざ当てが現われた。これは僧と一夜を過した時，失なったものであった。彼女はこれを見て，どこで失なったかを思い出した時，震え，まっ青になって，身体中が冷たくなった。贈物を忘れたふりをし，ばかなふるまいをした使者が箱の中身を知っているかを彼女は疑った。「今まで人々は私を貞淑と思ってきたのに」と彼女は思った。彼女は一段と気を取り戻し，使者のところへ戻り，このように封印された贈物が何であるか知っているかどうか，ルオドリエプがこれを箱に入れた時，同席していたかどうか尋ねた。全知なる神にかけて，彼は贈物が何であるか知らないと誓い，彼に委ねられた物が封印してあるのになぜ彼女が尋ねたのか，不思議に思った。それから彼女はこう言った，「あなたの縁者にしてお友達にこう伝えて下さい，あの人を除いてこの世に男の人がおらなくても，又あの人が婚礼の贈物として私に全世界をくださったとしても，あの人とは結婚するつもりはありません。しかとあの方に伝えて下さい。」使者はこの事に悲しんで彼女に言った，「なぜこんなに私が疑われたのか，不思議です。」彼女は言った，「話はもうよして，黙って帰りなさい。」(50)

使者は立ち去り，ルオドリエプのもとに急ぎ帰った。ルオドリエプは彼を見るや否やこう言った，「お前は飲み物を与えられ，手厚くもてなされ，満腹であることがわしにはわかる。わしの伝言がいかに受け入れられたか，言ってくれ。わしの贈物は——ためらわずに言ってくれ——ちゃんと受け取られたか？」こう言いながらルオドリエプは喜び，体を震わせて，声高に笑った。使者は言った，もし私を再びこのように使者とするならば，あなたは友としての私を失なうでしょうと。ルオドリエプは本気でこう言った，「言ってくれ，縁者の者よ，わしの大いなる愛をそなたが彼女に話した時，彼女は何と言ったかを。」「あなたの伝言を詳しく話しましたら，彼女はすっかり黙ってしまい，私のために立派な朝食を用意し，十二分なぶどう酒を運んでくれました。その上蜜酒もです。彼女があなたに何を答えようとしているかと，彼女に尋ねた時，彼女はこう言いました，『私のまことの心からあの人に伝えて下さい。木の葉と同じほど多くの好

意を。鳥の喜びと同じだけ多くの愛を伝えて下さい。草と花と同じだけ多くの誉れを伝えて下さい。』辞去を乞うたあとで，私は突然口を閉ざし，あなたの贈物を彼女に渡すことを忘れたとは，私はどうしたんだろうと，彼女に言いました。彼女はこれらを受け取ると，喜んで私のところから立ち去りました。しばらくしてから彼女は戻って来て，非常に怒って言いました，『あなたがもって来た贈物が何であるか知っているならば，言ってちょうだい。』私はすべてを御存じの神にかけて，決して中を見なかったし，中身が何であるか全く知らないと誓いました。なぜならば封印されている中身を知ることは私には出来ないことであることは明らかでした。それから彼女はこう言いました，『あなたの縁者にしてお友達にこう伝えて下さい。あの人を除いてこの世に男の人がおらなくても，又あの人が婚礼の贈物として私に全世界をくださったとしても，あの人とは結婚するつもりはありません。たしかにあの方に伝えて下さい。』」ルオドリエプは言った，「さて，思うに，わしのほかに誰も隠れて愛してはいない別の花嫁を求めねばなるまい。」(84)

ルオドリエプの母は出来る限り，貧しいキリスト教徒，寡婦，孤児，巡礼に尽くした。そのため，ルオドリエプが大いに祝福されるに至った。なぜならば神は，いかに彼をたたえようと欲しているかを，彼女に示した。彼女はある時，夢の中で二頭の猪を見た。これにたくさんの雌猪が伴なっていた。これらはルオドリエプに対して戦いを始めるためであるかのようにキバでおどしていた，しかし彼は二頭の猪の首を剣で切り落とした。突進する雌猪は殺された。そのあとで母は太く非常に高い菩提樹の木の夢を見た。その木の頂にルオドリエプが台の上に腰を下ろしているのを見た。彼のまわりの枝に戦いの用意のできているが如き軍勢がいた。すこしして から美しい雪のように白い鳩が飛んで来た。くちばしには高価な宝石の王冠をくわえていた。それをルオドリエプの頭にのせて，すぐに彼の横にとまり，彼に口付けをした，彼は拒否することなくそれを受けた。母はこれを夢の中で見てから，自分の見たこれらすべてが何を意味するかと考えた。それが誉れを意味することを彼女は知っていたとはいえ，高ぶらず，

謙虚であり，主がルオドリエプに与えてくれるであろう大いなる誉れのすべてを彼女自身のせいとせずに，主のわき出ずる慈悲に帰した。三日後に(101)彼女は，神が彼女に啓示したことを語った，彼が切り落とした獰猛な頭の猪のこと，二頭の猪に伴なった雌猪を殺したことを。彼が菩提樹の木の頂に腰をかけているのを見たかを，彼の下の枝に彼の家来どもを見たかを。鳩が飛んで来て，彼に王冠をもたらし，彼の手にとまり，彼に甘い口付けをしたことを。それからこう彼女は語った，「こういう夢を見てから，すぐに突然目覚めました，そしてこのようにして目覚めたことはたいそう私を苦しめました。この目覚めは，これらの事の結末が来たる前に私が死ぬであろうことを意味していることがわかります。息子よ，いかにしばしば神が慈悲によりお前を助け，死から救ったことかを，また国を逃れていた間お前をしばしば助けに赴き，お前が無事に，豊かになって国へ戻らせてくださったことを思い出しておくれ。今や私にはわかります，お前が大いなる誉れを手に入れるであろうことが。主の意にかなうことを何か私たちがしたならば，私たち二人に主がこのように報いて下さったんでしょうと言うことをたいそう私ははばかります。息子よ，そういうことを言わないように気をつけなさい。なぜならば，主が与えて下さる物のほか何も持っていない私たちに何が出来ましょうか。だがお前が幸であれ，不幸であれ主に感謝しなさい。」(128)

断　篇　XVIII

〔母の夢が実現される。洞窟の前でルオドリエプは小人を欺して，捕える。〕(102) 小人は飛びはね，逃げる事を願って，叫びながらあちこちはね回る，そしてついに疲れきって倒れ，かろうじて息をつく。彼に力が戻った時，ルオドリエプにたいそう謙虚に言った，「哀れな私の命を助けて下さい。私の知っている事であなたに好ましい事を申し上げましょう。もしあなたが私を殺さずに，又私の手をほどいてくださるならば，二人の王の宝をあなたに教えましょう，あなたと戦おうとしている父と息子の。父の名はイムンヒ，息子はハルトウンヒと申します。二人はあなたは打ちまかさ

れ，あなたに殺されるでしょう。唯一人生き残った王国全体の相続者である王女ヘリブルク，たいそう美しい乙女をあなたは手に入れるでしょう。しかし私が解きほどかれて，あなたに勧めることをあなたがしないならば，大いに血を見るでしょう。」ルオドリエプは小人に言った，「お前はわしに殺されやしない。わしがお前を信用することが出来たれば，すぐに解きほどいてやったのに。お前がわしをだまさないならば，お前は無事にわしのもとから立ち去れよう。お前が解きほどかれたら，わしに何も言わないであろう。」「かつて私たち小人の間でうそいつわりが幅をきかせたことなんてないでしょう。そんな時にはそのように長生きせずに，健全でないでしょう。あなたたちの間では欺きの心でしか話されません。そのためあなたがたは盛りの年令には届きません。一人一人の一生の長さはその人の誠実さによります。私たちは心の中で思っていることのほかは口に出してしゃべりませんし，病気を生み出す色々な食物を口にしません。それ故私たちはあなたがたよりも達者で長生きするでしょう。私を疑ってはいけません。あなたが私を良く信頼出来るように私はふるまいましょう。それでも私を疑うならば，私の妻を人質にして下さい。」彼は彼女を洞穴から呼び出した。彼女はすぐに出て来た。彼女は小さかったが，たいそう美しく，黄金と衣服で飾られていた。彼女はルオドリエプの足許に平伏して，嘆きの言葉を表わした，「すべての中で最高の方よ，夫の鎖をほどいて下さい。夫がすべてを果たすまで夫のかわりに私を捕えて下さい。」(32)

——終——

注

(1)　このような内容の部分が欠落している。

(2)　食事の初めに主人がパンを切る習慣と同様の習慣は，Hauck (1950, s. 619) によれば，九世紀初期のフルダとライヒナウの修道院文書に見られる。それによれば，食事の初めにパンが２人の修道士によって院長の席の前で切られる。

(3)　senis discis。タキトウスの「ゲルマーニア」(第22章) にもあるように古代ゲルマンの世界においては，卓は同時に皿の機能を有し，一人一人に当てられていた。ラテン語 discus はゲルマン語に借用せられ，英語 disch「皿」に，ドイツ語 Tisch「卓」に現われることからも解されよう。だが時代が下ると共に，Rd.

の十六章に見られるように，一つの卓に二人が着くようになった。

(4) ベネディクトゥス会会則53, 1参照：Omnes supervenientes hospites tamquam Christus suscipiantur「すべての訪れる客がキリストの如くに迎えられんことを。」又タキトゥスの「ゲルマニア」(第21章) にも現われる如く，客を手厚くもてなすことは古代からのゲルマン人の習慣であったらしい。

(5) 食事の前後に手を水ですすいだ。

(6) 食事の最後にぶどう酒を飲む習慣はまだイギリスに残っているという（G. ドークール「中世ヨーロッパの生活」文庫クセジュ p. 54)

(7) 村人を指す。

(8) mihi praecipitote 別れの際のきまり文句。中高ドイツ語の gebietet mir を模倣したと思われる。Vgl. Knapp Komm. Strecker (1921) s. 299

(9) mensam velare 直訳的には「食卓をおおう」の意であり，mhd. den tisch decken に相当するゲルマン語法と思われる。

(10) このような内容の部分が欠落している。

(11) fidem sanctam praedicere. Z と F は praedicare（=predigen）のように訳しているが，そうではなく K. L の訳の如く vorsprechen が正しいであろう。信経は credo「我信ずる」で始まる一定形式の信仰宣言。

(12) 村の裁判集会は日の出直後教会の前で行なわれた。

(13) rector. 支配者の意味であるが，フランク王国ではグラーフが，後にグラーフの部下たるシュルトハイスが裁判集会の議長を務めた。この rector はいわゆるシュルトハウスのことを指していると思われる。

(14) mordvita. ゲルマン語 *murþa からの借用語。注目すべくは，「殺人者」の意味では Rd. のこの個所にしか見られないことである。ゲルマン諸部族法典には mordridum, murd—, —re—, —t—, —a, —us の形で表われるが，すべて「謀殺」の意味で用いられている（例えばバイエルン部族法典19, 2, リブアリア法典15)。

(15) ancilla. ancilla は元来「下女」の意味である。裁判官が ancilla と彼女を呼んでいることから，彼女は老夫の家で以前下女であったことが，判明される（Rraun, 1962. s. 14, 64)

(16) 血の涙のモチーフは「ニーベルンゲンの歌」や「ローラントの歌」にも用いられている。diu ir vil liehten ougen ror leide weineten bluot「彼女の明るい眼から，悲しみのあまり血の涙がながれた」(ニーベルンゲンの歌1069, 4)。中世では涙は激しい心の動揺の際に心臓から出でて，眼に上がってくると，信じられていた。又キリストの血と関連づける神学的解釈も可能とされる；例えばルカ xxii, 44: st factus est sudor ejus, sicut guttae sanguinis decurrentis in terram「そして，その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」(Gerhards, 1962. s. 62f.)

(17) 以下に描かれた処刑の方法は中世において実際行なわれたものである。古代ゲルマン法にあっては，瀆神，姦通などのいわゆる破廉恥罪は死刑に処せられるべきものであった。J. Grimm は Rd. のこの個所について次のように述べている：die *dreierlei strafen*, unter welchen die verbrecherin dem mildgesinnten gericht selbst die wahl läßt (viii, 45-63), sind ganz im geiste der poesie des alten rechts, das sie in mehr als einem betracht erläutern, und das ersäufen in einem faß wird eben auch im Unibos 168. 169 verhängt. die *asche* des verbrannten leichnams der missethäterin soll *ins wasser gestreut* werden, damit sie nicht als schadenfrohe hexe
soll *ins wasser gestreut* werden, damit sie nicht als schadenfrohe hexe
wolken sammeln, regen hindern, hagel stiften könne. (Schm. s. xvi)

(18) per quam rea saepe fiebam. 美しい髪のために男達を誘惑した，の意味。

(19) 現世において罪を償うことにより，来世の罰が軽くなるとする考え。

(20) causidicur. 今日の欧米に見られる陪審員制度はその源をフランク時代にさかのぼることができる。その初期における裁判集会には，七名の常置の判決発見人（Ratbürger）が必要とされた。これは後にカルル大帝によって審判人制度（Schöffenverfassung）として制度化される。

(21) 焼き印は身体形の一つで，ローマ法の影響でまずランゴバルド法に表われ，九世紀以後フランク法にも表われる。額や頬にするのが普通であった（H. Conrad: Deutsche Rechtsgeschichte Bd Ⅰ. s. 171）

(22) nisi stellom quando ridebat. 直訳すれば，「彼女が星を見た時を除いて」となる。

(23) nona hora. 聖務日課の九時課は午後三時にあたる。

(24) このような内容が欠落していると推定される。

(25) このような内容の部分約36行が欠落している。

(26) このような内容の部分が欠落している。

(27) solaria celsa. バルコニーで腰を下ろし，景色を楽しむことが出来た。

(28) 以下18種類の魚の名が現れ出ているが，その8種類はラテン語であるが，他の10種類はドイツ語そのままである。挙げた魚はテーゲルンゼーでとれたものと思われる。

(29) lucius. Gloss. Ⅲ. 47, 10, Lucius hecht nhd. Hecht

(30) rufus rufus は元来「赤色の」の意味であり，即ち Rotfisch, 別名 Huchen のことと思われる。

(31) prahsina. bream (F (sd.) glossary)

(32) lahs. ドイツ語 mhd. ahd. lahs. nhd. Lachs

(33) charpho. 恐らくドイツ語. ahd. kaprfo. mhd. karpfe. nhd. Karpfen

(34) tinco. Gloss. Ⅲ 47, 44 Tinca slei nhd. Schlei

(35) barbatulus. barbus—Barbe (Mlat. wb. s. 1369) Gloss. Ⅲ 47, 39 Barbus barbs
(36) orvo 恐らくドイツ語 mhd. orve, nhd. Orfe
(37) alnt ドイツ語 inula-Alant (Mlat. Wb. Ⅰ. s. 421)
(38) naso. ラテン語 nasus, あるいはドイツ語 (ahd, nasa, mhd. nase) に由来するか判別しがたい。Kluge (Stymologisches Wörterbuch) によれば中世ラテン語として Rd. に初めて現われる。
(39) rubeta Aalraupe. (Habel)
(40) truta. Forelle (Habel)
(41) capito. Kaulkopf (Mlat. wb. Ⅱ. s. 229)
(42) angu lla. Gloss. Ⅲ. 45, 53 Angu lla âl
(43) vvalra 恐らくドイツ語 ahd. welira, mhd. wels nhd. wels.
(44) asco 恐らくドイツ語 ahd. asco. mhd. asche nhd. Äsche.
(45) rinanch ドイツ語 mhd. rînanke=renke, ein edler fisch süddeutscher seen (Benkcke. Müller. Zarncke, Mittelhochdeutsches Wörterbuch)
(46) agapuz ドイツ語 Gloss. Ⅲ 600, 1 percu agapuz ahd. agabûz (=agapuz), mhd. agapuz.
(47) simila, white bread (MLLM p. 972). ドイツ語 Semmel に借用された。ahd. sëmala, simila. mhd. sëmel, simel.
(48) tiro「小姓」とする訳もあるが，やはり「召使い」の意味だと思われる。
(49) ceu lucida luna reluxit. 美しい女性と太陽あるいは月との比喩は古くは聖書にも現われるが，中世ドイツ文学にもしばしば現われる。Quae est ista zuae progreditur quasi aurora consurgens, pulchra ut luna, electa ut sol「このしののめのように見え，月のように美しく，太陽のように輝き」(雅歌Ⅵ, 9)。Sam der liehte mâne vor den sternen stât, des schîn sô lûterlîche ab den wolken gât……「雲間から照り渡る明るい月が星々を圧しているかのように……」(ニーベルンゲンの歌283」等。
(50) このような内容の約9行が欠落している。
(51) Maior maior , iunior consedit herili.
(52) dapifer. Küchenme ster (dapifer), der das Küchendepartementz u ver walten hat (Schultz Ⅰ. s. 204)
(53) sodalis 小姓を指す。
(54) dominos ルオドリエプとその甥
(55) 召使いたち
(56) prandia cum cena 断篇Ⅴ. 注 (49) 参照
(57) poculum 原意は「杯」。一料理ごとにぶどう酒あるいは密酒が出された。
(58) limpha 手をすすぐための水

(59) 約11行が欠落している。

(60) discaligandum dis＋caligo に分析され得る。dis はドイツ語 zer (ahd. zir) と起源を同じくし，「分離，分裂」の意味を表わす接頭語である。caligo は名詞 caliga「靴，靴下，脚当」(Mlat. wb. Ⅱ. s. 77f) の派生語。全体で「靴を脱ぐ」の意味である。

(61) Lukka＝Lucca イタリア中部，トスカナ地方の古都，古くから手工業が盛んであった。

(62) K は欠落部分を次のように補っている：*ne bracca* sibi fluitaret「ズボンが翻らないように。」

(63) curduanelli Schuhe aus Korduan (Habel) スペインのコルドで作られていた手法に従ってやぎ革がなめされていた故に「コルドバ皮」と呼ばれる。

(64) 一種の魔よけと見られている (Hauck, 1950 s. 617, Braun, 1962, s. 92), だが Gamer は当時の流行品と推測している (Gamer 1957, s. 263)

(65) pellicium 断篇Ⅳ. 注(3)参照

(66) crusina 断篇Ⅳ注(3)参照

(67) このような内容が欠落している。

(68) nostratim 直訳的には「我々の言葉で」

(69) Pater noster「われらの父」マタイⅥ，9

(70) qui es in caelis

(71) lis lis lis caelis の語尾

(72) sciola magistra「賢明な女教師」

(73) canite 詩篇のどこかの箇所の冒頭 (K. Komm)

(74) harpator 竪琴 (harpa) は中世では最もポピュラーな楽器であった。イギリスより由来し，九世紀には大陸に知れ渡った (Schultz Ⅰ. s. 552)

(75) この個所は宮庭舞踏に関する文学史上最初の抽写 (K. Komm)，鷹 (falcho) と燕 (hirundo) について，Winterfeld (W. Anh. s. 497ff) 等は狂言的要素と考えているが，Dronke (1970, p. 55) 等は単なる文学的な比喩と考えている。

(76) 約99行が欠落している。

(77) sua res stet ゲルマン語法と考えられる。mhd. sin dinc stat. (Ottinger, 1931 s. 516)

(78) 再婚を意味する。古代ゲルマンの世界において，夫の死後の再婚は非常にまれであり，これを禁止する部族もあった，妻は生涯においてひとえに一人の夫を享けるのが常であった (タキトゥス，ゲルマーニア，第十九章)。サリカ系フランク人にあっては，寡婦を貰い受ける者は処女よりも高い指輪金 (reipus) を支払わねばならなかった (サリカ法典，第四十四章)

(79) panem missi「使者のパン」ドイツ語 Boteubrot に相当する語，慣用句とし

ては Rd. のこの個所が最初と思われる（Z. Komm）Botenbrot の由来は，使者が役目を果した時，派遣された先から三切のパンが渡されたことによる（Grimm. Deutsches wörterbuch Bd Ⅱ. s. 274）

(80) gaudentes omne pacti 負れた者が勝った者の虜となることを指しているのか。賭博で身柄を賭ける風習は古代ゲルマン時代に現われている（タキトゥス，ゲルマニア第二十四章）

(81) haec suus, ille sua. 文法的性が取り換えられている。正しくは haec sua, ille suus と言うべきところ。この句は「ミンネザングの春」の巻頭に収められている有名な中高ドイツ語の歌 "Dû bist mîn, ich bin dîn„「あなたはわたしのもの，わたしはあなたのもの」を想起させる。これはテーゲルンゼーの僧が集めたいわゆる「テーゲルンゼー書簡」の中に入れられた恋の常套語であったかもしれない。

(82) このような内容の部分が欠落している。

(83) 35行にわたってこのような内容の全くの断片である。

(84) このような内容の部分が欠落している。

(85) butina. ahd. butin (na), mhd. bü (te), nhd. Bütte「桶」のことであるが，中世の風呂桶は持ち運びの出来るものであった。タキトゥス「ゲルマニア，第廿二章」の記述によれば，古代ゲルマン人は食事前に入浴する習慣であった。

(86) lavacralis laena. Badenmantel (Habel)，入浴を終えれば，身体をふき，この浴用衣を着て，身体が冷えるまで床に横たわる習慣であった（Schultz. Ⅰ. s. 228）

(87) comes ここでは官職としての伯爵を指していないことは明らかである。K. Z はそれぞれ comes の原功的な意味，Begleiter, companion と訳し，L, F は意訳的に Ritter, knight と訳している。

(88) pincerna. serveur de vin—wineservant (MLLM, 797)

(89) aput Afros. ルオドリエプが海を渡る場面が R. に描かれていない故に，実際のアフリカを指していないことは明らかである。Dronke (1970, p. 38) は南イタリア，Langosch (1962, s. 285) はボーメンかフランスと考えている。いずれにしても詩人が具体的に国の名を挙げることは，当時の状勢としては不可能であったろう。

(90) 断篇Ⅴによると，2個目のパンはルオドリエプの婚礼の席で花嫁の前で切るよう，王から命ぜられている。この矛盾は恐らく詩人が途中で作品の構想を変えたものと思われる。

(91) このような内容の部分が欠落している。

(92) laudare. Du Cange によるとドイツ語 geloben に相当すると記されているが，しかしながら Gellimek (1967, s. 564) はこれを banns（教会でなされる

結婚公告）ととっている。だが banns (Eheaufgebot) は Conrad (1962, s. 404) によると12世紀以降に見られるとされているので，それ以前に行なわれていたかどうか疑わしい。

(93) 婚姻は後見人及び縁者の同意なくしては成立しなかったと思われる。

(94) eripiatur a scorto turpi digne satis igne cremari 当時姦通を犯した婦人は火刑に処せられた (Grimm, Jacob: Deutsche Rechtsaltertümer, Bd. 2. s. 282) かつてこのルオドリエプの甥は身持ちの悪い女のもとにいたことを意味する。digne は digno の写字生の書き誤り。

(95) magica 身持ちの悪い女のこと。

(96) 婚礼の際に贈物を交わす習慣（婚礼の翌朝，夫が妻に贈るいわゆる Morgengabe とは別）は古代ゲルマン時代から行われていたようだ。タキトゥスの「ゲルマーニア」（第18章）に次のような記述がある：Dotem non uxor marito, sed uxori maritus offert. intersunt parentes et propinqui ac munera probant, munera non ad delicias muliebres quaesita nec quibus nova nupta comatur, sed boves et frenatum equum et scutum cum framea gladioque. in haec muuera uxor accipitur, atque in ricem ipsa armorum aliquid viro adfert「持参品は妻が夫に齎すのではなく，かえって夫が妻に贈るのである。この時，（妻の）両親，近親が立ち会ってそれを検する。贈物は，女のもっとも喜びとするものを選ぶのでも，また新婦の髪を飾るべきものでもなく，単に幾頭かの手，および轡をはめられた一頭の馬，それに一口のクラメアと剣とを添えたひとつの楯である。この贈物に対して妻が迎えられ，妻はそれに対して，またみずから，武器のうちのなにか一つを夫に齎す」（泉井久之助氏訳）

(97) piramide tersit. 柱は自由人の世襲財産を意味し，剣は，姦通は死でもってつぐなわなければならないことを象徴している。Z によれば，中世後期には教会の入口の柱で剣がこすられるようになったという (Z. Introduction, p. 19)

(98) このような内容の部分が欠落している。

(99) このような内容の部分が欠落している。

(100) cidaris. 中高ドイツ語 schapel に相当する。Z. Comm.

(101) 三日後になって夢を語ると，夢は実現されない (K. Komm.)

(102) このような内容の部分が欠落している。

追　加　文　献

辞典，事典

Du Fresne, Charles, Sieur Du Cange: Glossarium mediae et infimae latinitatis. Hrsg. von Le Farre 10 Bde. Paris 1883-87 Neudr. Graz

1954 〔Du Cange〕

Lexikon des Mittelalters München, Zürich 1977ff.

研究文献

Amira, von Karl: Germanisches Recht, Berlin 1960 Conrad, Hermann: Deutsche Rechtsgeschichte, Karlsruhe 1962

Lütjens, August : Der Zwerg in der deutschen Heldendichtung des Mittelalters. Breslan 1911